

子どもと大人の識別に関する発達的研究

田丸敏高・植木綾子

How Do Children Distinguish the Adult from the Child?

TAMARU Toshitaka, UEKI Ayako

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第1巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 1/No.1

平成16年11月30日発行 November 30, 2004

子どもと大人の識別に関する発達的研究

田丸敏高・植木綾子

How Do Children Distinguish the Adult from the Child?

TAMARU Toshitaka*, UEKI Ayako**

キー・ワード：識別，子ども，大人，発達

Key Words: Distinguishment, Child, Adult, Development

問題と目的

本研究は、子どもが、「子ども」と「大人」をどのように識別するのか、について発達的に明らかにしようとするものである。これに関わる先行研究としては、NHK（1979）が、全国の小学6年生と中学2年生（各900人）を対象に、「早く大人になりたいと思いますか」と尋ねる質問紙調査をおこなっているものがある。「そう思う」と答えた子どもは小学6年生で22%、中学2年生で20%であり、「そう思わない」と答えた子どもは小学6年生で74%、中学2年生で76%であった。また、NHK（2003）は、「早く大人になりたいと思いますか」と尋ねる同様な調査で、中学生・高校生を対象にした、1982年、1987年、1992年、2002年の調査結果を比較している。「そう思う」と答えた中学生は、それぞれ35.3%、35.1%、34.7%、33.1%であった。また、「そうは思わない」と答えた子どもは、それぞれ56.8%、55.7%、60.5%、57.7%であった。

これに対して、田丸（1989）は、小学生を対象に、子どもが早く大人になりたいと思っているかどうか、またその理由は何かについて、社会認識の問題として、発達の観点から研究している。その結果、「早く大人になりたい」と答えた子どもは、小学2年生で42%、4年生で29%、6年生で26%であった。また、その理由については、「仕事」をあげる子どもが3学年合計50人ともっとも多かった。そのほか「お金」「遊び」「学校・勉強」「成長・老化」「自由」「人間関係」などがあげられた。また、「仕事」について言及した子どものうち、「なりたい」と答えた子どもは、仕事を具体的に考えているという特徴がみられた。さらに、田丸（1990）は、小学生に加えて幼児も含めた調査をおこなった。その結果、「早く大人になりたい」と答えた子どもは、幼児79%、小学2年生67%、4年生40%であった。また、その理由づけについては、幼児では、ほぼ「仕事」「お金」「勉強」というテーマに限られるが、2年生からは、大人のさまざまな面が語られるようになり、2年生全体で見ると、「赤ちゃんを産む」「大きくなる」「車」といったさまざまなテーマがあがってくる。また、4年生では、それぞれの子どもの大人のいろいろな面について語るができるようになる。

このように、「早く大人になりたいか」についての研究は、子どもの願望を問うものであるが、ここでは、子どもが子どもと大人とを何らかの仕方で区別していることが暗黙の前提となっていた。そして、その区別の仕方を問うことなく、「なりたい」あるいは「なりたくない」とする子どもの

* 発達科学講座

**鳥取大学大学院教育学研究科

割合やその理由について、分析し検討していた。しかし、子どもと大人との区別は前提であるどころか、実は困難な課題であった。田丸(1993)は子どもの回答を分析し、「大人」と「対を為すもの」に影響されて、大人になることは、肯定的にも否定的にも判断される」ことを示したが、そのとき「大人」は「仕事」や「お金」と対を為しているだけでなく、当然のことながら「子ども」とも対を為していた。「対」というのは結合であると同時に区別でもあるが、そうした「大人」と「子ども」との区別の仕方は、不問に付されてきたのである。カテゴリー的思考以前の子どもは、子ども一般と大人一般とを識別することが課題とはなりにくく、むしろ特定の子どもと特定の大人とを比較し区別しようとするのが十分予想される。本研究は、こうした識別の発達過程を示しながら、「子どもは早く大人になりたいか」について、改めて検討しようとするものである。

ところで、識別とは、ものともとの(事象と事象と)を区別することであるが、区別するためには共通性を示さなければならない⁽¹⁾。ガラスと板とを区別するためには、少なくとも両者とも薄い材質であるという前提を発見し、その上にたつて一方はたたくと割れるし、他方はたたいても割れないという区別をする必要がある。これが識別である。識別においては比較という操作(思考)が働いている。比較するためには基準が必要であるが、ガラスと板の比較の場合、基準は「たたく」という行為である。この行為は、ガラスあるいは板にとっては外的であり、したがって偶然的なものである。それは人間によって外部からもたらされた基準である。この基準は、人間の関心、それを生み出すところの人間の生活から生まれた。たたくとどうなるかは人間の生活がもたらした問題であって、ガラスあるいは板にとっては偶然的な事柄である。これに対して、ヒトとサルとの識別は、どうだろうか。ヒトとサルとを比較するとき、もちろんヒトに比べてサルは毛深いというような外的基準に依ることも可能である。ともに毛があるのでその上で毛の量を比べることはできる。しかし、ヒトとサルとは発生的な関係も有している。進化の過程でヒトとサルとが分岐したのであるから、そうした生物進化的な関係を見出したならば、ヒトとサルとを比較する基準はもはや外的ではなく内的であり、偶然的ではなく必然的である。基準は人間の生活の都合によるというよりは、客観的事実による。そうした識別ができるとき、サルからヒトへの進化という変化に関する説明も可能になる。

こうした識別と説明とは、科学の進歩という認識の歴史的発展に依存して発達したのであるが、子どもにおいてはこれらは思考の発達に伴って可能になる。その発達を明らかにするためには、そうした思考を発揮すべき課題を用意する必要がある。この課題はガラスと板というような外的識別の課題ではないし、またヒトとサルといった学校知識による識別の課題でもない。教えられたことはないが、しかし、考えることの可能な課題が与えられる必要がある。さらに、その課題が社会認識のような心理学的研究の未開拓な分野からもたらされるならばいっそう研究的意義は大きい。

以上の検討より、本研究の目的は以下の通りである。

第1は、子どもに早く大人になりたいかどうか、およびその理由を問い、明らかにすることである。その際、間接的に言及される「大人」と「子ども」の識別の仕方についても明らかにする。

第2は、大人とは何か、子どもとは何か、子どもと大人のちがいは何か、を問い、明らかにすることである。ここでは、子どもが、「大人」や「子ども」をどのように表象するのか、「子ども」と「大人」をどのように比較するのか、を示すこと通じて、「子ども」と「大人」の識別過程を直接的に明らかにする。

第3は、大人は働くのに子どもは働かないのはなぜか、と問いかけることによって、労働を基準

に、「子ども」と「大人」をどのように比較し区別するのかを明らかにする。

以上を通じて、子どもがどのように「子ども」と「大人」を識別しているのかを明らかにする。

方法

[調査対象児]

鳥取県東部H町内の幼児および児童 73 人 (TABLE 1)

[調査期間]

2002 年 10 月 1 日～10 月 17 日

[場所]

保育所内の保育室および小学校内の教室

[手続き]

1 対 1 の個人面接調査。はじめにラポールをとり、そのあと

「子ども」と「大人」の識別に関する質問を、1 人あたり 20 分程度おこなった。

質問は回答の正誤を求めるものではなく、子どもの思考過程を明らかにできるように、子どもの自発的な回答を促した。子どもの発言が終わったところで次の項目に移った。インタビュー過程はカセットテープレコーダーに録音し、それをおこしたものを 1 次資料とした。なお、本論文でとりあげるものは以下の質問項目である。

1. あなたは早く大人になりたいですか。それはどうしてですか。
2. 大人って何ですか。子どもって何ですか。子どもと大人のちがいは何ですか。
3. 大人は働くのに子どもは働かないのはどうしてですか。

結果

ここでは、「早く大人になりたいか」という質問に対する子どもの回答、「子どもと大人のちがいは何か」に対する子どもの回答、「大人は働くのに子どもは働かないのはなぜか」に対する子どもの回答について、分析する。

1. 早く大人になりたいか

(1) 早く大人になりたいかどうか

ここでは、「早く大人になりたいか」という質問をしたときの子どもの回答を、学年別に整理する。

TABLE 2 は、その結果を示したものである。

「早く大人になりたい」と答えた子どもの数は、幼児 8 人 (89%)、1 年生 8 人 (100%)、2 年生 6 人 (46%)、3 年生 3 人 (30%)、4 年生 3 人 (27%)、5 年生 1 人 (13%)、6 年生 8 人 (57%) であった。

TABLE 2 「早く大人になりたいか」に対する学年別回答結果

学年	なりたい	なりたくない	両面	その他	合計
幼児	8 (3, 5)	1 (1, 0)	0	0	9 (4, 5)
1 年	8 (4, 4)	0	0	0	8 (4, 4)
2 年	6 (2, 4)	6 (4, 2)	0	1 (0, 1)	13 (6, 7)
3 年	3 (3, 0)	5 (5, 0)	1 (0, 1)	1 (0, 1)	10 (8, 2)
4 年	3 (1, 2)	7 (3, 4)	0	1 (0, 1)	11 (4, 7)
5 年	1 (0, 1)	5 (3, 2)	2 (1, 1)	0	8 (4, 4)
6 年	8 (4, 4)	4 (4, 0)	2 (1, 1)	0	14 (9, 5)
合計	37 (17, 20)	28 (20, 8)	5 (2, 3)	3 (0, 3)	73 (39, 34)

人 (男, 女)

また、学年別の回答結果をグラフにすると、以下のようになる (FIG. 1)。

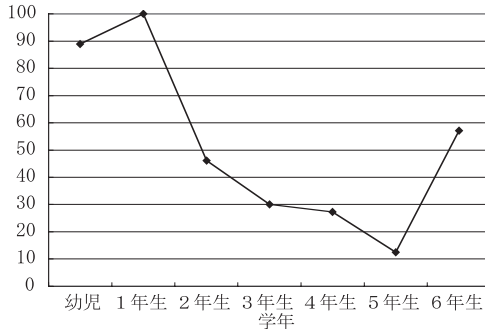


FIG. 1 「なりたい」と答えた子どもの割合

TABLE 3 理由を述べた子ども

	述べた子ども	学年総数
幼児	6	9
1年	5	8
2年	7	13
3年	8	10
4年	10	11
5年	8	8
6年	14	14
合計	58	73

人

TABLE 4 子どもの理由づけ

	なりたい	なりたくない	両面
幼児	仕事(1)、お母さん(1)、同語反復(1)、車(1)、場面(1)	勉強できない(1)	
1年	いろんなところ出る・結婚(1)、車(1)、親切な大人(1)、手伝い(1)、場面(1)		
2年	会社・車(1)、仕事(1)、仕事・車(1)	あそび(1)、加齢(1)、クリスマス(1)、勉強(1)	
3年	頭・背(1)、車(1)、車・わかる(1)	あそび(2)、労働(2)	楽しい(1)
4年	あそび(1)、車で病院(1)、仕事(1)	あそび・労働(1)、お年玉・労働(1)、加齢(2)、労働・加齢(1)、労働・結婚(1)、労働・悩み(1)	
5年	好きなこと・友だち(1)	加齢(1)、自然のまま(2)、料金・動きやすい・労働(1)、労働(1)	あそび・労働(1)、修学旅行(1)
6年	お金(2)、お金・買い物(1)、買い物・仕事(1)、仕事(2)、勉強・家庭(1)、労働・お金(1)	家事労働(1)、自然のまま(1)、労働(2)	あそび・労働(1)、労働とお金・お年玉(1)

() 内は、子どもの数

(2) 早く大人になりたい, なりたくない理由

子どもに「早く大人になりたいか」とたずねたあと、その理由も聞いた。結果を TABLE 3 に示す。また、子どもが述べた理由を分類したものが、TABLE 4 である。

(3) なりたいかどうかとその識別

「早く大人になりたいか」という質問をしたとき、その理由づけで、子どもがどういう識別をしているのかを整理したところ、「A」「A⁺」「B」「B⁺」の4つに分類できた。分類の基準は以下の通りである。

A…今の自分と将来の自分を識別しているが、その際に、今の自分をもとにこたえるもの。

ex)「ケーキ屋さんやりたい」(幼児・女)

A[^]…今の自分と将来の自分を識別し、その際に、能力、人格の変化など、成長する自分を想定しているもの。

ex)「手伝いやあがができるから。勉強がわかったりするから」(1年・女)

B…今の自分とまわりの大人を識別しているが、その際に、子どものことについては言及するが、大人はその否定でしかないもの。

ex)「子どもはいっぱい遊べる。大人は仕事とかしたりする。」(2年・男)

B[^]…今の自分とまわりの大人を識別し、その際に、大人の具体的な姿を思い浮かべるもの。

ex)「仕事が大変。大変そうだから、なんか大人の人見て。親とか。」(4年・女)

TABLE 5 子どもの識別のタイプ

	識別した子ども	A	A [^]	B	B [^]
幼児	6	6	0	0	0
1年	5	2	3	0	0
2年	7	4	2	1	0
3年	8	0	3	3	2
4年	10	2	3	0	5
5年	7	2	2	0	3
6年	14	1	7	2	4
合計	57	17	20	6	14

人

2. 子どもと大人のちがいをどうとらえるか

ここでは、「大人とは何か」「子どもとは何か」「子どもと大人のちがいは何か」という一連の質問をしたときの子どもの回答を、順に述べる。

(1) 大人とは何か

「大人とは何ですか」という質問に対する回答を整理したところ、「場面」「対」「属性」「カテゴリー的」「属性比較」の5つに分類できた。TABLE 6は、その結果を示したものである。

場面…特定の大人や状況を思い浮かべて答えているもの。

ex)「人がな、困ったるときとか子どもが泣いとるときとか助けてあげる」(幼児・女)

対…「大人」と対になるものを答えているもの。

ex)「人間」(1年・男)

属性…ある性質に注目しているもの。

ex)「おっきい、背が高い」(1年・女)

カテゴリー的…「〇〇する人」など、カテゴリー的に答えているもの。

ex)「仕事したりする人」(3年・女)

属性比較…ある性質を、大人と子どもそれぞれに分配して答えているもの。

ex) 「子どものころよりも背がおっきくなってて」(4年・男)

TABLE 6 大人とは何か

学年	言及した子ども	場面	対	属性	カテゴリー的	属性比較	合計
幼児	3	3	0	0	0	0	3
1年	5	2	1	2	0	0	5
2年	5	3	0	0	2	0	5
3年	6	1	0	2	3	0	6
4年	9	1	0	4	2	2	9
5年	7	0	0	2	1	4	7
6年	13	0	0	10	2	1	13
合計	48	10	1	20	10	7	48

人

「属性比較」は4年生以上でみられた。

(2) 子どもとは何か

「子どもとは何ですか」という質問に対する回答を整理したところ、「場面」「対」「属性」「カテゴリー的」「属性比較」の5つに分類できた。TABLE 7は、その結果を示したものである。

場面…特定の子どもの状況や状況を思い浮かべて答えているもの。

ex) 「おにごっことかもいっしょにしてくれる」(1年・女)

対…「子ども」と対になるものを答えているもの。

ex) 「かわいい子」(1年・男)

属性…ある性質に注目しているもの。

ex) 「元気がよくて」(4年・女)

カテゴリー的…「〇〇する人」など、カテゴリー的に答えているもの。

ex) 「あそぶための人間」(2年・男)

属性比較…ある性質を、大人と子どもそれぞれに分配して答えているもの。

ex) 「大人よりは小さい」(5年・男)

TABLE 7 子どもとは何か

学年	言及した子ども	場面	対	属性	カテゴリー的	属性比較	合計
幼児	3	2	1	0	0	0	3
1年	6	2	4	0	0	0	6
2年	10	5	0	1	4	0	10
3年	6	1	0	4	1	0	6
4年	9	2	0	4	1	2	9
5年	8	0	0	5	0	3	8
6年	13	0	0	11	0	2	13
合計	55	12	5	25	6	7	55

人

「大人」についてと同様、「属性比較」は、4年生以上でみられた。

(3) 子どもと大人のちがいは何か

「大人とは何か」「子どもとは何か」とそれぞれ個別に尋ねたあと、「子どもと大人のちがいは何か」と尋ねた。TABLE 8は、その回答をカテゴリー別に整理したものである。カテゴリーは、「場面」「属性」「属性比較」「年齢基準」の4つであった。

場面…特定の状況を思い浮かべて答えているもの。

ex) 「大人はお料理つくるし、子どもは公園であそぶ」(幼児・女)

属性…ある性質に注目しているもの。

ex) 「顔」(1年・男)

属性比較…ある性質を、大人と子どもそれぞれに分配して答えているもの。

ex) 「子どもは背が低いけど、大人は背が高い」(4年・男)

年齢基準…年齢のちがいについて答えているもの。

ex) 「年。世間から大人って言われてるのは20歳くらいから。」(6年・男)

TABLE 8 ちがいは何か

学年	言及した子ども	場面	属性	属性比較	年齢基準	合計
幼児	2	2	0	0	0	2
1年	8	1	5	2	0	8
2年	10	3	5	2	0	10
3年	6	0	1	4	1	6
4年	10	2	4	3	1	10
5年	7	0	5	1	1	7
6年	13	0	6	4	3	13
合計	56	8	26	16	6	56

人

3. 大人は働くのに子どもは働かないのはどうしてか

「大人は働くのに子どもは働かないのはどうしてか」という質問に対する回答を整理したところ、「同語反復」「場面」「属性列挙」「属性比較」「本質」の5つに分類できた。分類の基準は以下の通りである。その結果を示したものが、TABLE 9である。

同語反復…同じことを繰り返しているもの。

ex) 「まだ子どもだけ(子どもだから)」(2年・男)

場面…具体的なものや特定のものをあげるもの。

ex) 「子どもはちっちゃいけど、私もお手伝いしたことある」(1年・女)

属性列挙…ある性質に注目しているもの。

ex) 「まだ小さいからできない」(幼児・男)

属性比較…ある性質を、大人と子どもそれぞれに分配して答えているもの。

ex) 「子どもは小さいし、大人みたいに大きくなってから働く」(3年・男)

本質…「年」「生活のため」「教育制度」について考えているもの。

ex)「子どもは学校に行ったり、勉強しなきゃいけないし、大人は生活のためにお金を稼ぐ」(5年・女)

TABLE 9 「子どもは働かない」理由

学年	理由を述べた子ども	同語反復	場面	属性列挙	属性比較	本質	合計
幼児	5	0	3	2	0	0	5
1年	7	0	2	4	1	0	7
2年	7	1	1	3	0	2	4
3年	9	1	1	4	3	0	8
4年	10	0	0	3	7	0	10
5年	8	0	0	0	4	4	4
6年	12	2	1	2	3	4	6
合計	58	4	8	18	18	10	44

人

「場面」については、複数の子どもの指摘したのは、幼児と1年生であった。「属性比較」については、3年生以上で多く認められた。また、「本質」については、2年生の2名をのぞけば、5年生および6年生に4名ずつ認められた。

結果のまとめ

1. 「早く大人になりたいか」という質問に対して、「なりたい」と答えた子どもは、幼児、1年生ではほぼ全員であるが、2年生から5年生にかけてだんだんと減少していく。
2. 子どもが早く大人になりたいかどうか考える際には、「今の自分と将来の自分を識別しているが、その際に、今の自分をもとにこたえるもの」、「今の自分と将来の自分を識別し、その際に、能力、人格の変化など、成長する自分を想定しているもの」、「今の自分とまわりの大人を識別しているが、その際に、子どものことについては言及するが、大人はその否定でしかないもの」、「今の自分とまわりの大人を識別し、その際に、大人の具体的な姿を思い浮かべるもの」の4つのタイプが見いだされた。
3. ①「大人とは何か」、②「子どもとは何か」、③「子どもと大人のちがいは何か」、という質問をおこなったところ、①、②については「場面」「対」「属性」「カテゴリー的」「属性比較」に分類することができ、「属性比較」についてはいずれも4年生以上でみられた。③については、「場面」「属性」「属性比較」「年齢基準」に分類することができ、「年齢基準」については3年生以上でみられた。
4. 「大人は働くのに子どもは働かないのはなぜか」という質問については、「同語反復」「場面」「属性列挙」「属性比較」「本質」に分類することができ、「場面」については低学年に特徴的であり、「属性比較」と「本質」については高学年に特徴的であった。

考察

子どもは、早く大人になりたいかどうかについて考える際、「子ども」と「大人」とを比較しなければならない。しかし、この比較ははじめから意識的になされるわけではない。すなわち、はじめから「子ども一般」と「大人一般」とを概念的に識別し比較するわけではない。ワロンは、児童期の思考の発達において、カテゴリー的思考と対による思考とを区別しているが、概念的な識別はカテゴリー的思考に属することである。これに対して、対による思考の段階においては、子どもはどのように「子ども」と「大人」を区別しているのだろうか。ここでは、子どもとの対話資料に基づき、こうした区別と比較の特徴とその発達について、検討したい。

1. 印象をもつが定義不能な段階

子どもは、「大人」についてある印象を持っていて、それに依拠しながら早く大人になりたいかどうか考える。しかし、改めて、大人とは何かと問われると回答不能になる。

F. R. 幼児（男）

Rくんは、早く大人になりたいですか？—「ううん。」—ううん。なりたくない。どうして？—「え？できないけ。」—何が？—「勉強とか。」—大人って何ですか？—「大人。知らない。」—子どもって何ですか？—「知らない。」—子どもと大人のちがいは何か？—「知らない・・・」

本児は、「早く大人になりたいか」と問われると、「ううん」と答える。大人は「勉強ができる」という印象をもっているようだ。しかし、印象でしかないため、大人とは何か、子どもとは何かといった定義、あるいはちがいについては答えられない。

K. M. 2年（男）

Mくんは、早く大人になりたいですか？—「なりたくない。」—どうして？—「なんか早く大人になったら、死んだらやだけ。」—大人って何ですか？—「・・・わかりません。」—子どもって何ですか？—「・・・勉強したり、覚えたり・・・」—子どもと大人のちがいは何か？—「・・・わからん。」

本児もまた、「大人」と「死」という印象が結びついており、早く大人になりたいかという問いには、「なりたくない」と答えている。しかし、大人の定義やちがいについては答えられない。

2. 具体的な場面をもとに比較する段階

子どもは、「大人」と言われると、子ども自身の身近にいる他者を思い浮かべる。それらは、子どもの具体的な日常の場面とともに回答にあらわれる。

T. M. 1年（女）

Mちゃんは、早く大人になりたいですか？—「(うなずく)」—うん。どうして？—「お手

伝いやあができるから。」——そうか。ほかにもある？——「洗濯をたたんだり、勉強がわかったりするから。」——大人って何ですか？——「大人は、洗濯をたたんだり、・・料理を作る。」——それから？——「・・勉強を教えてくれる。」——子どもって何ですか？——「勉強したり、・・・あそんだりする。」——子どもと大人のちがいは何かな？——「大人は料理や洗濯をするけど、子どもは勉強したり、あそぶ。」

本児は、「大人」と「料理・洗濯」が対を構成し、「子ども」と「勉強・あそび」が対を構成している。これらはいずれも場面的であるといえる。

O.N.2年(女)

Nちゃんは、早く大人になりたいですか？——「はい。」——どうして？——「早く仕事がしたい。」——どんな仕事がしたい？——「会社とかで、勉強したりする。」——大人って何ですか？——「・・・わかりません。」——子どもって何ですか？——「なにをですか？」——うん。子どもって何だと思う？——「・・・子どもは、小さい人。」——うん。それから？——「あそぶのが大好きな人。」——うん。それから？——「・・・わかりません。」——子どもと大人のちがいは何ですか？——「遊んでるときと、・・・会社で仕事してるとき。」

本児もまた、「大人」と「仕事」、「子ども」と「あそび」を対にして考えている。さらに、「あそんでるとき」と「仕事してるとき」というように、「とき」という言い方が特徴的であり、場面的な思考を示している。子どもと大人、それぞれの場面を答えている。

3. 身体的特徴をもとに比較する段階

子どもも大人も同じ人間であり、同じような体をもっている。そういった身体的に共通である特徴をもとに、子どもは子どもと大人を比較する。

K.M.1年(女)

Mちゃんは、早く大人になりたいですか？——「えーとねー、親切な大人。」——親切な大人になりたい？どうして？——「だってねー、けがしたりしたら、えーっと、親切な人にもなれないから、だから、親切な人にしたい。」——大人って何ですか？——「大人って、大きいけ。」——大きいけ。それから？——「だから、だから大人。」——うん。ほかにも大人ってあるかな？——「手やな、足やな、足や、足で、手やあも大きいし、顔も大きいし、つま先も大きい。」——うん。ほかには？——「それから、それから背も高いし、・・・それから、つめ、つめじゃない手、手の指先も長いし、足の指も長い。」——うん。ほかにもあるかな？——「足がこんぐらい長い(手を広げる、30 cmくらい)、大きい。」——うん。それから？——「それから、口や、鼻やあ、口は、こんぐらい開くかなあ。(目の前で、手でわかを作って示す)子どもの口はこんぐらい、かな。で、大人の口はこんぐらい開く。」——子どもって何ですか？——「子どもって、ちっちゃいし、それから、えーとプリントやんないし、・・・」——それから？——「それから、学校にも行けないし。」——学校にも行けないし。——「保育園ぐらいたったら行ける。」——保育園ぐらいたったら行ける。——「それから、中学校とかも行けんし、・・・プールにも、ちょ・・・入れるけど、だけどちっちゃい人だったら入

れん。」——子どもと大人のちがいは何ですか？——「だって背もちがうし、足も、ちがうし、手もちがうし、鼻も口もちがうし、目だったらおんなじでなあ。」——目だったらおんなじ？ どうして？——「歯もちがうし、つめもちがうし、それから足もちがう。」

本児は、大人について「手や足やつま先が大きい」といった身体的特徴を列挙し、大人と子どもを比較している。ちがいについても、そういった身体的特徴を列挙している。

K.Y.1年（女）

あなたは、早く大人になりたいですか？——「うん、になりたい。」——うん、どうして？——「だっていろいろお手伝いとかできるもん。」——あ、本当。いろいろってどんなお手伝いできる？——「お皿洗とか。」——うん。ほかには？——「…料理とかつくれる」——大人って何ですか？——「…………おっきい。」——おっきい。それから？——「…………背が高い。」——それから？——「だっこもできる。」——だっこもできる、それから？——「車の運転もできる。」——車の運転もできる。それから？——「…………一緒に遊んでくれる。」——子どもって何ですか？——「…………あそぶ。」——あそぶ。それから？——「……………」——それから？——「いっしょにあそんでくれるし、」——うん。——「それから、おにごっことかもいっしょにしてくれる。」——そうかおにごっこも。——「うん。」——それから？——「ほかのあそびとかジャンケンとかも。」——それから？——「うーん…………あそぶことが好きだから。」——子どもと大人のちがいは何ですか？——「背が違う。」——背が違う。うん。それから？——「髪の毛の長さがちがう。」

本児は、大人や子どもについてそれぞれの場面をあげて答えているが、ちがいについては「背」や「髪の毛の長さ」といった身体的な特徴をあげ、それをもとに大人と子どもを比較している。

N.Y.3年（男）

Yくんは、早く大人になりたいですか？——「早くはなりたくない。」——早くはなりたくない。どうして？——「大人になるとたいぎいから。」——何がたいぎいの？——「なんかすると、仕事やあてたいぎそうだから。」——たいぎそう。どうしてそう思った？——「なんか遅くなりそうだし、お仕事してたら。」——遅くなる？何が？——「なんか仕事しとったりしたら、遅くなるけえ嫌だ。」——家に帰るのが？——「うん。学校に、で、あそんどる方が、すぐに帰れる。」——大人って何ですか？——「大人…………仕事する。」——それから？——「仕事して、それで、帰り、帰ってくる。え、もうわからん。」——子どもって何ですか？——「勉強する。」——勉強する。——「あとは、遊ぶ—とか…………」——うん。——「えー？…………もうええー、いい—いい—けー…………ゲームをする…………」——うん。ゲームをする。——「…………もうそれ以上ない。」——子どもと大人のちがいは何ですか？——「子どもと大人？」——うん。——「ん？わけがわからんような…………」——わけがわからんような？——「なんかわからん。」——わからん？ちがいはない？——「ないような…………気がする。」——じゃ大人と子どもってまったく一緒かな？——「さあ、ちがうと思う。」——ちがうと思う？どういう風に？——「うーん、髪型が変わってるとか、まあ、いろいろ、わからん、それ以上わからん。」

本児は、最初大人と子どもそれぞれの場面をあげて答えていたため、ちがいについて問われると、「わけがわからんような」と、うまく比較できず混乱してしまう。しかし、「髪型」という1つの特徴をとりだし、大人と子どもを比較する。

0.M.1年(女)

あなたは、早く大人になりたいですか?—「うん。」—うん。どうして?—「・・・わからん。」—大人って何ですか?—「わからん。」—子どもって何ですか?—「わかんない。」—子どもと大人のちがいは何ですか?—「ちょっと大人のな、子どももちょっとちがう。」—うん。どんなふうにならなうか?—「子どもはちょっとちいちゃくて、おとま、大人がちょっと大きくて。ちがう。」

大人と子どもを「体の大きさ」によって比較しており、それが「ちょっとちがう」と言う。

0.T.1年(男)

あなたは、早く大人になりたいですか?—「なり…たい。」—どうして?—「わからん。」—大人って何ですか?—「人間。」—子どもって何ですか?—「人間。」—子どもと大人のちがいは何ですか?—「高さ。」

本児は、「大人」と「人間」、「子ども」と「人間」と、それぞれ共通の項が対となっている。そのため、ちがいについて問われると「高さ」という同じ性質で比較することができる。

4. 多面的に比較する段階

子どもはやがて、1つの特徴だけでなく多面的な特徴にもとづいて、子どもと大人を比較するようになる。

N.N.2年(女)

Nちゃんは、早く大人になりたいですか?—「(首をふる)」—なりたくない。どうして?—「・・・」—大人になりたくない理由ある?—「まだ習ってない勉強があるから。」—うん。習ってない勉強って?—「掛け算や割り算。」—そうか。それ習ったら、早く大人になりたい?—「(うなずく)」—大人って何ですか?—「・・・子どもが大人になった人。」—子どもって何ですか?—「・・・子ども、子ども、子ども(つぶやくように)・・・」—子どもって何かな?—「・・・」—わかんない?—「勉強してだんだん大人になっていく人。」—子どもと大人のちがいは何かな?—「背の高さがちがう。」—うん。それから?—「・・・考え方がちがう。」

本児は、「背」という身体的特徴を表す項だけでなく、「考え方」という項を用いている。身体という外面的な特徴から離れられるということは、次のいろいろな性質をあげられる段階へとつながっていく。

K.T.2年(男)

Tくんは、早く大人になりたいですか?——「なりたくない。」——どうして?——「だって、子どもの方がいっぱい遊べたりする。」——子どもの方がいっぱい遊べたりする。はい、じゃ大人は?——「大人は、仕事とか・・・とか、えーと、仕事とかしないといけないから。」——大人って何ですか?——「・・・うーん・・・子どもを守ったり、・・・仕事もやって・・・て、えっと、・・・子どもよりも背が高くて、・・・頭がいいし、・・・やさしい。」——子どもって何ですか?——「ちっちゃくて・・・ちっちゃくて・・・いっぱい遊んで。」——うん。——「勉強して・・・友だちを作って・・・いっぱい教えてもらう・・・」——子どもと大人のちがいは何ですか?——「・・・(長い沈黙)・・・大人は、仕事に行くけど、子どもは、学校に行って、背も、力もちがうし、・・・子どもはいっぱいあそぶけど、大人は、あんまり、あ、仕事で、あんまりあそばなくて、・・・で、・・・大人は、ニュースとか見るけど、えっと、なんか、子どもが見るテレビは見ない。」

本児は、「背」や「力」という身体的特徴を表す項に加えて、「あそぶ量」や「テレビの見方」などの新しい項を用いて、大人と子どもを区別している。

N.K.2年(男)

Kくんは、早く大人になりたいですか?——「なりたくない、まだ。」——どうして?——「え、クリスマスが楽しみ。」——クリスマスが楽しみ?——「クリスマスがねー、クリスマスね大人になつたらもらえなくなるから。」——大人って何ですか?——「大人?えっと、仕事ができる、つりができて、海も行けて、車乗れて、免許取れて、えっと、はい、それしか。」——子どもって何ですか?——「遊ぶための人間。」——子どもと大人のちがいは何ですか?——「わからん。」——わからん?——「旅行行けたり、つり、海にも行けたり、免許取れたり、魚とりにも行ける。それだけ。」

本児は、「クリスマス」がもらえるのももらえないのがちがう、として、大人と子どもを比較している。また、ちがいについて、「旅行に行ける」「免許を取れる」など、能力的な特徴についても列挙している。

N.K.4年(男)

Kくんは、早く大人になりたいですか?——「いいえ、子どもの方がいいです。」——どうして?——「・・・大人になると、なんか、仕事が大変だし、なんかちょっとたぶん悩み事がたくさんできると思うから、なんか、そうだと思う。」——大人って何ですか?——「大人・・・は、お母さんは家のことをしなきゃいけないし・・・。」——うん。それから?——「えーと、ほとんどのお父さんは、外勤めをすると思う。」——うん。それから?——「・・・うーん。子どもで食べたり飲めないものが、大人には、でてくる、し、・・・。」——うん。それから?——「たぶん、ぼくが大人になったら、なんか、声が低くなると思う、し・・・。」——それから?——「・・・それから・・・あ、子どもとちがって、睡眠時間が短くなっても大丈夫とか。」——子どもって何ですか?——「子どもは・・・えっと、仕事が勉強だし・・・手伝いをしないといけないし・・・。」——うん。——「元気がよく・・・元気がないといけないし・・・。」——うん。——「・・・体を鍛えないといけないし・・・。」——うん。それから?——「だんだん頭よくなりたくないといけない、です。」——子

もと大人のちがいは何ですか?——「・・・大人の人は、先のことをほとんど見通しているし、・・・」——うん。——「・・・・・・あー。それなど、です。」

お父さんにもいろいろなお父さんがいることを本児は知っていて、その多くに共通する特徴を指摘するために、「ほとんどのお父さんは」という言い方をしている。いわば、「父」を一般化している。また、「声」という身体的特徴、「頭がよくなる」という能力的特徴、「悩み事ができる」という人格的特徴など、さまざまな性質をあげて、大人と子どもを比較している。ちがいについては、「それなど」とくくっているが、ほかにもいろいろな性質があることをわかっている。

5. 子ども一般と大人一般をカテゴリー的に比較する段階

大人と子どもについて一般的に考えられるようになったり、さまざまな性質をあげられるようになったりすると、子どもはそれを上位の概念でくくることができるようになる。

K.M.4年(女)

あなたは、早く大人になりたいですか?——「うーんまだ大人にはなりたくない。」——どうして?——「えっと、大人は大変。」——どんなところが大変かな?——「お仕事したりすると、疲れがたまったりストレスがたまったりすると、えらい。」——大人って何ですか?——「大人は・・・子どもの親とか。」——子どもの親とか。——「子ども。孫。」——そして?——「おばあさん、おじいさんとか。」——とか。——「うーん。もう20歳、もう20歳すぎた人とか。」——とか。——「とか、うーん。近所の人。」——近所の人って?どんな人?——「うーん、なんかまあ20、30こえてる人。」——20、30こえてる人か。——「うん。」——それから?——「と、それから、あと、・・・みかけ。見た目。っていうか。」——見た目。見た目がどんな人かな?——「うーん、やっぱり大人っぽっていうか、・・・大人、な顔みたいな感じの。」——子どもって何ですか?——「子どもは・・・うーん、まだ、若いっていうか。」——若い。——「若いし、ちょっと背が。」——背が?——「大人よりもまあ、小学生とかはちっちゃいから。」——ちっちゃいから。それから?——「えーっと、遊ぶっていうか、子どもはいっぱい遊ぶ。」——それから?——「それから学校にも行く。」——はい。それから?——「・・・から、・・・外でいっぱい遊ぶ。」——子どもと大人のちがいは何ですか?——「年。」——年。年がどうちがうの?——「大人は、大きいけど、子どもはまだちっちゃい。」——うん。それから?——「それから・・・体。体とか。」——体。——「やっぱり大人の方が大きい。力もあるし。」——そうか。ほかにはあるかな?——「ほかには・・・ちょっとわからない。」——大人は働くのに子どもは働かないよね?どうしてですか?——「えっと、まだ子どもは勉強もまだ学んでないけど、大人はもういろいろなことを経験しているから、だと思います。」——そっか、大人はどんな経験していると思う?——「勉強とか。小学校とかだったらいろいろ勉強したり、まあ修学旅行とかもいろいろ行ったりしているし、中学校とかになったらもっと難しい勉強になったり、高校生とかではまた新しいなんか、もっと大変なことがあるかもしれないし、大学になったらまたやりたい・・・今度はもう自分でやることを経験しないといけないから。」

本児は、すでに特定の大人と特定の子どもを比べようとしなない。さまざまな大人とさまざまな子どもをとりあげ、それぞれの特徴を指摘している。「大人」も「子ども」も一般化されている。その

うえでさらに、「年齢」によって、両者を本質的に区別している。両者に共通し、かつ両者の上位概念である「年」をあげて比較している。

以上のようにみても、大人と子どもの識別については、5つの段階—①印象をもつが定義不能な段階、②具体的な場面をもとに比較する段階、③身体的特徴をもとに比較する段階、④多面的に比較する段階、⑤子ども一般と大人一般をカテゴリー的に比較する段階—があることが示された。

〈注〉

(1) たとえば新版K式発達検査では、「語の差異」、「語の類似」課題を設け、前者については、6:6超〜7:0の課題とし、たとえば「卵と石とはどうちがいますか。」という問いかけに対し、適切な内容について、適切な表現をした場合、正答とする。ここでの適切な内容とは、「比較の基準が適切である」ことと、「両者を同一の基準で比較している」ことである。後者については、8:0超〜9:0の課題とし、たとえば「舟と自転車はどう似ていますか。」という問いかけに対し、適切な内容について、適切な表現をした場合、正答とする。ここでの適切な内容とは、「両者の直接的包括概念(類概念)」と、「主要な共通属性」である。

文献

- NHK 世論調査部編 中学生・高校生の意識 日本放送出版協会 1984
- NHK 放送文化研究所 NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 日本放送出版協会 2003
- 田丸敏高 子どもは大人になりたいか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学) 第31巻第2号 1989 439-451 ページ
- 田丸敏高 続 子どもは大人になりたいか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学) 第32巻第1号 1990 197-208 ページ
- 田丸敏高 子どもの発達と社会認識 法政出版 1993
- ワロン 滝沢武久・岸田秀訳 子どもの思考の起源 明治図書 1968
- ワロン 竹内良知訳 子どもの精神的発達 人文書院 1982

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate how children distinguish the adult from the child. Subjects were 73 children in a nursery school and in an elementary school (5-12 years olds). They were asked 3 questions by interview method. (1) Do you want to be grown-ups as soon as possible? Why do you think so? (2) What is adult? What is child? How do you distinguish the adult from the child? (3) Why doesn't children work, while grown-ups work?

The main results were as follows: Almost all the children in the nursery school and first grade in the elementary school answered they wanted to be grown-ups, while second through fifth graders didn't answered that they want to be grown-ups. As process of distinguishing the adult from the child, 5 stages were identified. (1) non-definable stage, (2) situational comparison stage, (3) physical comparison stage, (4) multiple comparison stage, (5) categorical comparison stage. The significance of Wallon's developmental theory of thinking was clarified through this study.